壁

旅芝居殺人事件

皆川博子

白水社

壁——旅芝居殺人事件

一九八四年九月一〇日印刷
一九八四年九月二五日発行

著者 ©皆川博子
発行者 高橋孝
印刷者 山岸真純
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部 〇三(二九二)七八一一
編集部 〇三(二九二)七八二一
振替 東京 九—三三二二八
郵便番号 一〇一

三秀舎印刷・黒岩製本

ISBN4-560-04168-7

皆川博子

壁

旅芝居殺人事件

白水社

壁——旅芝居殺人事件——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

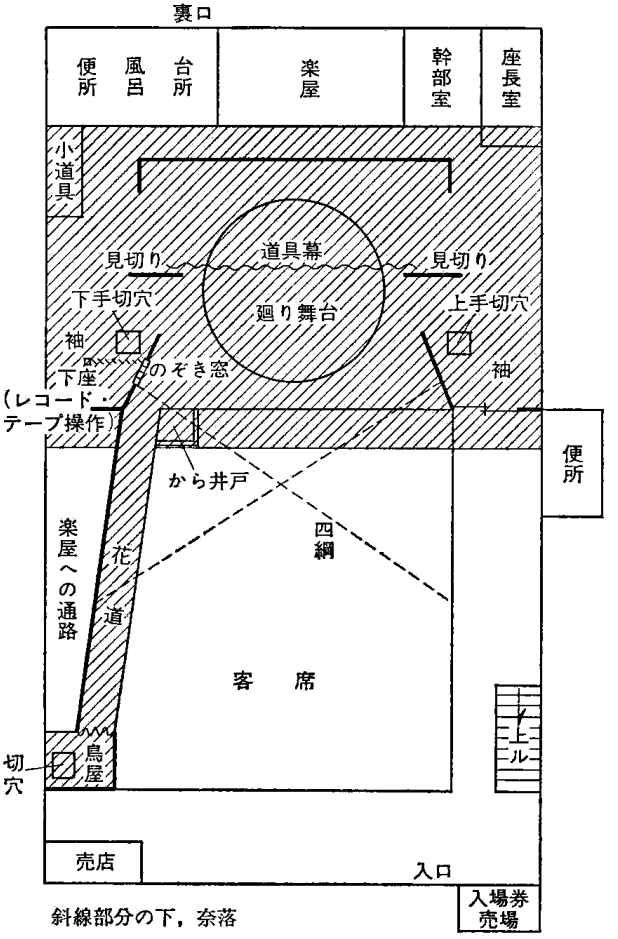
目次

I 流花之章 9
II 鬪花之章 33
III 幻花之章 99
IV 弄花之章 137
V 燎花之章 169

登場人物

三藤秋子（わたし）　浅尾花六
その母　大門次郎
里見マチ子　大門の妻

市川蘭之助劇団
市川蘭之助　座長　市川蘭十　頭取（マネージャー）
市川喜代　蘭之助の母　セイさん　幕引、雑用係
嵐菊次　＊　＊
嵐小菊　菊次の弟　立花知弘　東京のフリーの役者
大月城吉　姫村英太郎　『劇団姫村』座長
若嶋雄司郎　『劇団若嶋』座長



斜線部分の下，奈落

桔梗座見取図

装幀　吉岡実

I　流花之章

1

大輪の花が、宙を行く。

天井の一隅に、光がのびた。強烈な光は、その周囲を闇に塗りこめた。スポットライトの輪のなかに素足が浮かぶ。はり渡された綱が白い足の裏にくいこみ、紅梅色の蹴出しを割って歩み進む力をこめた足の指に、血の色が透く。高々とからげ、帯にはさんだ花浅葱(はなあさぎ)の小袖の褄、緋のしごき、白塗りの蘭之助をライトがとらえる。

桟敷の上に十文字にはられた綱の、交点にむかって進む蘭之助に集中する客の眼、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

息づかい、嘆声、すべて消え失せた。わたしは、地上にただひとり、蘭之助をみつめている。

いや、舞台の上でそれぞれの役柄も忘れ、座長の無事を気づかう座員たちは、わたしの意識にのぼらないわけにはいかない。

悪右衛門に扮した市川蘭十、その家来の浅尾花六と大門次郎、狐の面をつけた嵐小菊、里見マチ子、大月城吉。

下手の袖の奥では、蘭之助の母親市川喜代が、伴奏音楽のレコードを操作しながら、だれよりも祈るような目を、四綱(ようつな)をわたる息子にむけている。

もうひとり、奈落の底に、保名(やすな)の役の嵐菊次が、息をつめて狐葛葉(きつねくずのは)の蘭之助が『から井戸』を降りてくるのを待ち受けている。

前の場で安倍童子(あべのどうじ)をつとめたわたしは、幕引きのセイさんと上手袖にいた。わたしは座員ではないけれど、子役が必要なのでかり出された。

わたしの父がこの芝居小屋『桔梗座』の持主なので、わたしは役者たちにかわいが

られていた。

本歌舞伎とはちがう、けれんの手管でお客さまの御機嫌をうかがう小屋芝居である。子別れにつづく信田の森、本歌舞伎なら、葛葉姫をさらおうと家来をひきつれた石川悪右衛門と、狐勘平、与勘平、野勘平、歌芝女との大立廻りとなる終幕が、市川蘭之助のけれんの見せ場であった。

身が執心の葛葉姫、さっきチラリと姿を見た。保名が逃げてもかまいはせぬ。鼻がお敵をとり逃がすな。

心得ました。

急げ急げ。

と、花道を舞台に来た悪右衛門に、家来が、

アレアレ、あそこにおります、あそこにおります。

それ、つかまえろ。

と、家来二人が駕籠をかついで上手に入り、すぐに舁き戻してくる。

お旦那、首尾よく捕えました。

イヤ、さすがは身共が家来ほどある。手柄々々。コレ葛葉の君、そもじがどのように嫌うとも、こうなっては是非がない。得心して、なびき給え。

と、駕籠をあけるまでは、常磐津の出語りなどもちろん使えず、レコードの安手な伴奏であるのをのぞけば、本歌舞伎をほぼ忠実になぞっていたが、被衣(かずき)をかぶって駕籠から出たのが、赤っ面の下素奴(げすやつこ)と悪右衛門にののしられる狐勘平ではなく、定法にない花浅葱の着付の狐葛葉で、下手袖から走り出た狐三匹とともに、悪右衛門一味を翻弄したあげく、被衣を宙にとばし、下手袖の壁にとりつけられた梯子をのぼって、綱わたりのけれんとなる。

それに続く段どりは、天井高くはられた四綱を、救助綱も命綱もなしに渡り、中央で足を綱にかけ逆吊りとなり口から火を吹く。ふたたび綱の上に立って戻り、途中、綱から垂直に吊り下げられた絹梯子を伝い下りて、舞台と花道の交点にもうけられた『から井戸』に消える。

から井戸は、舞台と奈落を結ぶ通路である。奈落で待機している保名役の菊次が、狐葛葉から葛葉姫への早替りに手を貸し、上手袖のかげの切穴から、保名と葛葉姫、手をとって本舞台にあらわれ、そのあいだに市川蘭十と大月城吉は、二役の信田庄司、その妻柵（しがらみ）にと、袖かげで扮装をかえていて、他の者は全員村人のつくりとなり、華やかに踊って幕を閉じる、ということになっていた。

蘭之助の四綱は、これがはじめてではない。中日をはさんで三日間の特別興行でも、わたしは見ている。狂言日替りの小屋芝居で、三日間連続特別興行の外題は四谷怪談であった。お岩の四綱渡りと逆吊りを、蘭之助は危なげなくこなしている。

昨日、客を前にしての蘭之助の口上も、自信にみちて力強かった。

……いよいよ、明日一日で、御当地ともお別れでございます。この一箇月、みなさまにはたいそうかわいがっていただきました。一段高い舞台の上から失礼ではございますが、心はみなさまの下座（しもざ）に下りまして、厚く御礼申し上げます。本当にお名残り惜しうございます。明日は千秋楽、みなさまの御声援にこたえて、蘭之助、大車輪の

けれんをお目にかけます。中日三日の特別狂言、みてくださったお客さまも多いと存じます。もう一度四綱をやれと、大勢のお客さまから言われました。それで、明日千秋楽は、特別狂言葛葉子別れで、四綱渡り、逆吊り、早替り、蘭之助のけれんのすべてを、みなさまのお目に残してお別れしたいと思います。……

その言葉のとおり、この日、昼夜二部興行の昼の部で危険な妙技をみごとにやりおおせた後の、夜の舞台であった。

ライトは蘭之助の足を追う。四網の中央に仁王立ちになった蘭之助の軀は、わずかに揺れている。高鳴ったレコードが音を止めた。静寂は荒野を吹きぬける風に似た。

蘭之助の孤独を、わたしは感じた。十七歳で一座を背負い、このときまで六年間、蘭之助は孤独でありつづけたにちがいない。無限の闇の高みに立つ蘭之助の目は何を見るのかと、わたしは思った。蘭之助を見上げる観客を、わたしはほとんど憎んだ。桟敷もまた、闇の底にある。白く反転した太陽の幻影をスポットライトは闇の毛足を

灼いて作り、その中央に、蘭之助は幻光の王として立つ。蘭之助の手が小さく動き、口もとにゆく。このわずかな動作が均衡を乱し、綱は揺れを増した。『吹き火』を口に含んだのだ。

綱をしずめるかわりに、蘭之助は大きくのけぞって、綱を蹴放すかにみえた。逆落としになった蘭之助の足は綱にかかり、飛翔する肉体をつなぎとめた。

紅梅色の蹴出しの裾はたくみに腿にからまる。そのとたん、蘭之助は烈しく咳きこんだ。『吹き火』が小さい流星のように落下した。そのゆくえを、わたしは見るどころではなかった。のけぞって逆吊りになるとき、火を吹くべき息を、つい逆に吸いこみ、器具につめた花火の粉末がのどに入ったのだと考えたのも後のことで、客たちの悲鳴のあいだを、わたしの叫びが縫った。

蘭之助は辛うじて落ちず、上半身をじりじりと曲げて持ち上げ、両手で綱を握った。よじのぼって綱の上に立つ余力はなく、両手で吊り下がったまま袖の方に戻ろうとする。そのあいだも咳こんで身をよじった。スポットライトは消え、無残な姿を闇が包

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com